

『明治の英雄像』の意味と構造

— 国定教科書にみる人物像の分析 —

亀 山 佳 明

Meaning and Structure of “Heroes’ Image in Meigi Era”

— An Analysis of the Men of Characters in the Schoolbooks compiled by the States —

Yoshiaki Kameyama

I. 英雄像の定義と類型

この論文の目的は二つある。一つは英雄像把握のための枠組の探求であり、もう一つはこの枠組によって具体的な事例を分析することである。ここではその分析対象として国定教科書がとりあげられている。

1. 英雄像の定義

英雄的人間像とは、それが構成される社会集団にとって理想を実現もしくは体現すると思われる人物像のことである。この場合次の二つを区別する必要がある。人々に外部からモデルとして与えられる「模範像」と、実際に彼らの内部に取り入れられ、彼らの胸中で生き生きと躍動する「理想像」との区別である。模範像は必ずしも全面的に理想像と重なり合うわけではない¹⁾。

ところで、社会集団と理想との関係について述べておきたい。デュルケムによれば、(1)どのような社会集団にも集団が自らを意識し、自らの感情を維持するためには会合と集中化が必要で、この集中化によって道徳生活が高揚され、理想が形成されるという。そして、(2)理想を通して社会集団は自らの創造と再創造を達成すると主張した。彼は「1つの社会はそれと同時に理想を創造しないでは自らを創造することも、再創造することもできない」と述べている²⁾。さらに、(3)理想はある人格神に体現されなければならないとし、社会集団が多面的な信仰対象を有する状態から一元的対象へ移行するにさいして、神話的英雄が生み出され、社会の諸理想を体現するという。

デュルケムのいう理想体現の人物をM. シューラーは「典型」Vorbild とよんだ。彼によれば、典型の理念は「人格の理念」と「根本的な価値理念」から形成される。そして、この理念は歴史的人間と結びつくことによってはじめて人々にとって「効力のある典型」（典型のモデル）となることができる。人々は自分たちを含めて実際的人間をこの典型を通して把握、分析し、測定するのである³⁾。シューラーの「典型のモデル」は模範の考え方に近い。

以上の指摘からここでは英雄像を次のように考えておこう。(1)社会集団の所有する根本的価値（理想）は人格として提示される。(2)この人格は歴史において様々な人間として具体化され、人人の関心をひき、影響を及ぼす。(3)しかし、これらの英雄像はその社会の文化の型や時代の評価に左右されて浮動し、拘束性の強い模範像になったり、生き生きとした理想像になったりする。

2. 英雄像の類型

英雄像は価値的次元と社会的次元から構成される。シエラーは価値の次元から英雄像の五類型を作った⁴⁾。彼は、人間には五つの根源的価値、「聖なるもの」、「精神的なるもの」、「高貴なるもの」、「有用なるもの」、「快的なるもの」が存在し、その各々に典型が対応するという。すなわち、「聖者」、「天才」、「英雄」、「文明の指導的人物」、「享受の芸術家」である。

(1)聖者とは「聖なるもの」を体現する人物で、彼は「神」以外のものとは関連づけられない。したがって、彼は世俗的な規範や普遍的な尺度によっては測定されえない存在である。彼は人々に向かって直接働きかけて、「精神的人格一般による愛の共同体」を形成する。それゆえ、彼のもつ有効性は「超世界的」であると同時に「世界的」であり、天才の有効性のようにただ単に世界を包囲するのでもないし、また英雄のように一国民、一民族をのみ包含するのでもない。随順者は彼を模倣して生き、模倣行為のうちで聖者の人格存在と生とを永遠化する。

(2)天才とは純粋な精神的価値（美、純粋な認識、正義）の代表的な担い手である。社会的次元のカテゴリーでは、彼は芸術家、哲学者にして聖者、立法者にして裁判官の形態をとる。天才は言葉の深い意味において「世界直観と世界評価」の真の拡大を行う存在であって、彼の有効性は彼の作品によって実現される。それゆえ作品に対する理解力を備えた精神的人格の見出される空間、時間の全てにその有効性を及ぼすことができる。このため彼は「世界市民的」な性格を獲得する。

(3)英雄とは、自らの「衝動的な生」に対して、人並みはずれた「精神的意志」を所有する人物である。彼はこの意志力によって生の集中、恒常不変性、確実性を達成する。彼は生命価値を実現する存在である。生命価値は生命力の発展と拡大を意味し、シエラーはこれをプラトンに倣って「高貴さ」とよんだ。英雄は生命力の展開、維持を通して生活活動領域、行動活動領域、支配活動領域の拡大と維持をはかる。しかし、彼の有効性の及ぶ範囲は一国民、一民族の枠をはみ出すことなく、それらの内部に限定されている。

(4)文明の指導的人物は歴史において根源的価値を実現してみせる存在ではない。彼は人間が意欲することのできる価値、「実用性の価値」を達成する。彼は既存の価値に「進歩」をもたらし、その行為と作業とによって英雄と認知される。社会的カテゴリーとしては、医者、科学研究者、技術者、経済の指導者があげられる。彼の有効性の及ぶ範囲は、実現される価値の普遍的性格（たとえば科学）から特定の集団に限定されないが、聖者や天才が人間を超越するのに対して、彼はあくまで人間次元にとどまっている。

(5)享受の芸術家は、五類型のうちで一番下位に位置づけられている。シエラーは根源的価値に序列を想定しており、「快適さの価値」を一番低いものとした。彼の本質は「快的さの享受が彼にとってある芸術へと形成される」点に存在しており、他の全ての価値、たとえば聖なるものすら享受の対象としてしまう。彼はこうした過程を「内的一貫性」をもって達成する。しかし、彼は快を欲しているのではなく、あくまで快を「享受する」ことを欲しているのである。ところで快適さはその本質において自己価値であるから、享受の芸術家はエゴイストたらざるを得ない。したがって、彼の及ぼしうる有効性の範囲は、個人に対してであって、集団にまで及ぶことはない。⁵⁾

シエラーの以上の五類型は、通時的・共時的な相の下に具体化される諸英雄像を分類する尺

度として使用することができる。

3. 反英雄像

シエラーの五類型は社会集団にとって肯定的な価値を実現する存在であった。これに対して反英雄像は否定的な価値を体現する。彼は道徳を無視したり、それに背いたりする存在で、社会集団にとって「悪い実例」を示す。ある人物像が社会の通時—共時的方向において理想像として具体化されている場合、英雄像と反英雄像とを截然と区別することは困難である。人々の内部で生き生きとしたイメージを保つ理想像は、常に両者の要素の混合体である。それが英雄とされるか、反英雄とされるかは社会のあり方や時代の評価によって、そのどちらの要素が強調されるかに依存しているからである。

英雄像の性格は、また、社会集団の価値構成の様式によって規定される。価値が多元的に構成される社会においては、諸価値間に相殺作用が働き、特定の価値が絶対化されることはない。そのため諸価値を体現する英雄像が群雄割拠する。こうした社会では英雄像は曖昧な性格を賦与され、時には社会の潜在的な葛藤や疎外を表現する反英雄像に接近することがある。英雄像—反英雄像の接近は、模範像と理想像との距離が少ないということである。

一方、価値が一元的に構成されている社会では、諸価値は中心的価値に吸引され、価値のヒエラルヒーが形成される。したがって、中心価値と抵触する価値を体現する人物像はヒエラルヒー内から排除される。しかも、ヒエラルヒー内の人物像は中心価値と照応し合う部分のみが拡大強調され、ために諸英雄像は平板化され、一種の「硬化現象」を呈する。人物像中の反英雄的性格も公的メディア（教科書）から私的メディア（非教科書）へ追放され、模範像と理想像との間に大きなズレが生ずることとなる⁸⁾。

4. 具体化の二側面

実際の英雄像は、さきの理想型が文化の通時—共時的の2方面において具体化されたものである。通時的方向とは文化の世俗化に伴う「神々の零落」の側面であり、共時的方向とは俗領域の人物像が聖化される側面である。

(1) 聖から俗へ（通時的側面）

神話は神による奇事奇瑞を述べたものであるが、それを成立させる基盤は人々の信仰であった。しかし文化の世俗化は人々の信仰力を弛緩させ、神々の聖性を弱化する⁷⁾。こうした神々の零落は神々を俗世界へ接近させ、神話から「伝説の英雄」や「昔話の英雄」を誕生させる。神話から派生する諸英雄像は、その社会集団において、英雄像形成の基本パターン（原型）を構成する。すなわち各時代の英雄像は原型に二重投影され、そのうち、うまく重なり得たものが時代を越えた生命力を獲得する。どのような文化も文化に固有な原型を幾つか所有している。

(2) 俗から聖へ（共時的側面）

共時的側面とは、特定の時代局面において特定の人物が人々の想像力を喚起し、彼らの理想を担う人物像として聖化される過程である。O. E. クラブは、ある人物像が特定の集団に個有な「社会的タイプ」Social Type. から広範な集団のそれへと拡大成長する契機を、「浸透作用」Penetration と「還帰作用」Imputation とのダイナミックスに求めている⁸⁾。浸透作用とは、当の人物像がどれほど受け手の注意を喚起し、彼らの想像のうちへ浸透しうるかということである。他方、還帰作用とは、逆に受け手がその像に様々な思いを仮託し、自分たちの希望にそうよ

うに造型することである。この両作用の作動の程度が、人物像の社会集団における知名度を決定する⁹⁾。

ところで、実際の英雄像は通時―共時の両側面が交差するところに創出される。たとえば、豊臣秀吉を事例に挙げてみよう。周知のように彼は卑賤な身分から立身し、関白の地位にまで昇進した人物である。彼の経歴は、これだけで当時の人心に大きな浸透作用を及ぼしたのであるが、その上彼は自らの出生の卑賤さを逆手にとって、それを神秘化した。彼は民族の文芸パターンの有力な1つである「貴種流離譚」に自らを投影させ、自己神格化を演出したのであった。この神格化は人々の還帰作用によって相乗化され、ここに「大閤伝説」が完成されたのである¹⁰⁾。

5. 英雄像の社会的機能

英雄像の形成、伝承の過程は、1種のコミュニケーション・プロセスである。英雄像はこのプロセスにおいて、主として価値を意味する記号である¹¹⁾。英雄像＝記号は文化内にコード化されており、受け手はコードに従って解読することができる。

英雄像の社会的機能は、英雄像＝記号が集団と個人に対してもつ「社会化」の機能である。この場合英雄像の意味する価値が、規範的価値と理想的価値の両側面をもつことに注意する必要がある。

社会集団は、自らの存続と維持のために、集団にとって重要な役割を英雄像＝記号のうちに制度化し、モデルの体系を構成する。集団は、これらのモデル体系を支持し、モデルに合せて成員を補充し、訓練し、彼らの統制を行う。成員にとって、英雄像＝記号の提示するモデルは成員としてあるべき、またなすべき役割モデルを意味する。こうした規範―統制の機能を記号の規範的価値が担うのである。

他方、理想的価値は、さきのデュルケムの指摘のように、集団の創造と再創造の機能をもつ。集団が、社会構造と理想との間に十分な整合性を保つ場合、理想的価値は集団に強い凝集性を賦与する。逆に社会構造と理想との間に不整合性が顕著になるとき、理想的価値は社会構造が理想へ整合するよう集団に変動を促す。

ところで、記号の集団への機能は同時に成員のパーソナリティーの形成を意味する。彼は記号との同一化を通して規範と理想を超自我のうちへ取り込む。この超自我は無意識に属しており、しかも超自我の指導によって自我が形成されるのであるから、英雄像の自我形成に及ぼす影響力は、当人に自覚される以前の問題であり、意識化される度合いが少いほど影響力は大きいと言える¹²⁾。

II. 国定教科書にみる英雄像

次にIの一般的考察を理論的な枠組として、明治期の国定教科書に登場する英雄像を分析しよう。国定教科書とは、国家の名のもとに、理念的文化を制度的文化として具体的に表現したものと考えられる¹³⁾。教科書中に登場する人物像は何らかの点において衆人より勝れた人物として描出されている。しかし、彼らは理想的性格よりも、むしろ規範的性格を強くもっている。彼らは全て模範像である。これらの模範像がどの程度人々の理想像となりえたのかという問題は、ここでは問はない。

周知のように、国定教科書は明治二十三年の教育勅語の「旨趣に基づいて」編纂発行された教

亀山：『『明治の英雄像』の意味と構造』

科書である¹⁴⁾。明治三十七年発行の第一期から昭和十六年発行の第五期に至る間、都合五回の改定が行なわれた。ここで分析対象とするのは、その中の第二期の教科書である¹⁵⁾。この教科書は、第一期のものに比べて普及率が高く、ほぼ全国の小学校で使用され、その内容構成も昭和初年に至るまで基本的には変化していない。

1. 意味と構造(-)

第1表と第2表は、国定教科書への登場頻度の多い人物、上位15までを表にしたものである。さきに述べた英雄像の類型にしたがって、彼らのうちの代表的人物を分類してみよう。

第1表 国定修身書に登場頻度数の多い人物

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人物名	明治天皇	二宮金次郎	上杉鷹山	渡辺清登	加藤正	フランクリン	豊臣秀吉	貝原益軒	伊能忠敬	佐太	高田屋嘉兵衛	中江藤樹	ナイチンゲール	楠木正成	天照大神
課数	19 $\frac{1}{2}$	18	15	12	11	11	10	9	9	8	7	7	7	6	5 $\frac{2}{3}$
回数	五	五	四	三	四	四	四	五	四	四	五	五	四	五	四

第2表 国定国語教科書に登場頻度数の多い人物

順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
人物名	源義経	明治天皇	大主命	水兵母	豊臣秀吉	浦島太郎	乃木希典	楠木正行	花咲天爺	神武天皇	日武尊	天照大神	孔	那須与一	東郷元帥
課数	15	10	10	7	7	6	6	6	6	5	5	5	5	5	5
回数	五	五	五	五	四	五	四	四	四	五	五	四	四	四	三

* 上記の表は唐沢富太郎、『世界の理想的人間像』中央公論社1963, pp. 1210~1213による。

(1)第一の類型「聖者」に当る人物は、ほとんど存在しないといってよい。しかし、国定教科書中には、五類型中において聖者に与えられた位置と意味において、聖者に代替しうる存在がある。それは天皇の存在である。「昔、天照大神瓊瓊杵尊を降して此の国を治めしめ給へり。尊の御曾孫は神武天皇にまします。天皇御即位の年より今日に至るまで二千五百七十余年にして御子孫世世相つぎて天皇の御位に登らせ給へり。世界に国は多けれども我が大日本帝国の如く万世一系の

天皇をいただくものは他に存せざるなり¹⁶⁾。」

天皇家は神の家系であり、天皇自身は「現人神」である。また、「朕惟フニ我カ皇祖祖宗国ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ」という記述から判断できるように¹⁷⁾、天皇はあらゆる徳（価値）の発する源である。したがって、天皇は聖者同様すべての諸価値を超越し、価値を体現する諸英雄の養い親の位置を獲得する。

(3)第三の類型「英雄」は、教科書中において多くは武人（武士、軍人）として登場する。通時的英雄として、八幡太郎義家、加藤清正、木村重成、楠木正成などが、また共時的英雄として、日清、日露両戦役の英雄、木口小兵、広瀬中佐、橘中佐、乃木將軍などがあげられる。「英雄」は生命価値を体現し、生命力の拡大と維持とを行為において示す存在であったが、武人としてのこれらの諸英雄は、戦闘行為における勇敢さやその戦功によって、自らの英雄性を証明したのであった。

(3)第四の類型「文明の指導的人物」は、社会的次元の職業カテゴリーにおいて、文化人（学者、医者、社会事業家）や実業家として登場する。学者としては、渡辺登、貝原益軒、新井白石、伊能忠敬、医者としては、小島焦園、ジェンナー、社会事業家としては、二宮金次郎、井上でん、ナイチンゲールなどがあげられている。また、実業家としては、伊藤小左衛門、高田屋嘉兵衛、上杉鷹山などが登場している。彼らはともに各々の領域において、「有益な実績」や「進歩」をもたらした模範像である。

(4)第二の類型「天才」と第五の類型「享受の芸術家」の両者に該当する人物は、一人も登場しない。前者は自ら新しい価値を創造する存在であって、そのために特定の集団を超越するがゆえに、また、後者は快楽の追求者として消費的、背徳的性格を有し、あくまでエゴイストであるゆえに、両者ともに後述する天皇を頂点とする「権威のヒエラルヒー」という容器をはみ出してしまう存在だからである。

(5)以上の分類の他に、社会的次元における階級カテゴリーの視角が必要である。これによって、支配者—被支配者の関係を示す模範像が提示される。支配者として、上杉鷹山、徳川光圀、松平定信、豊臣秀吉が、被支配者として様々な庶民像、おふさ、おつな、水夫虎吉、馬子孫兵衛などが登場する。これらの庶民像は英雄像というよりも、支配者の側から要請される、被支配者としてのあるべき姿を提示する模範像である。

2. 意味と構造(二)

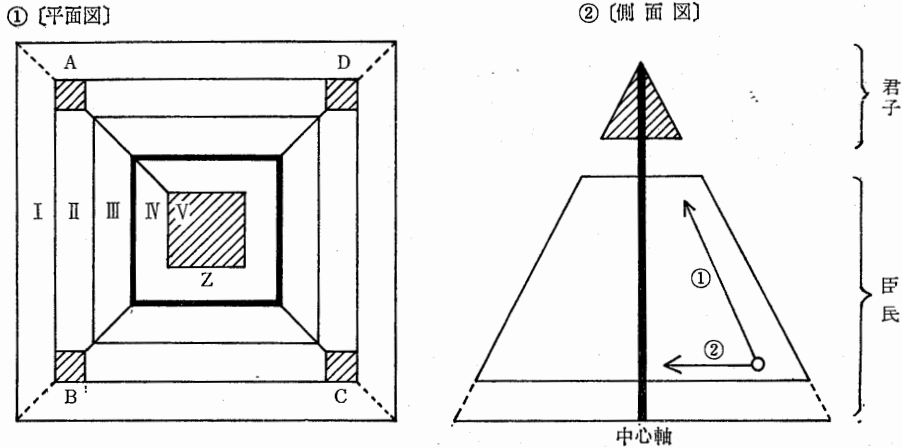
次に上記の諸英雄像が、教科書においてどのように配置されているのか、その相互関係の構造と意味について述べよう。

第1図は、英雄像の各々に賦与された権威の程度に従って構成された「権威のヒエラルヒー」を示す図である。周知のように、明治の国体において、天皇は世俗的、道徳的領域の価値を一元的に体現する存在として位置づけられていた¹⁸⁾。教科書に登場する諸英雄像はこの絶対的中心から渦文状に波及してくる権威の光被にどの程度浴することができるか、によって、自己の位置づけが決定された。つまり、天皇を頂点にして諸英雄像がヒエラルヒー化されたのである。

第1図の①は、権威のヒエラルヒーの平面図を示している。図中A～Dは、それぞれさきに挙げた英雄の類型に相当している。Aは神話・昔話の英雄像、Bは武人の英雄像、Cは文化人の英雄像、Dは実業の英雄像である。また、図中I～Vの数字は、権威（階級）の階梯を示しており、

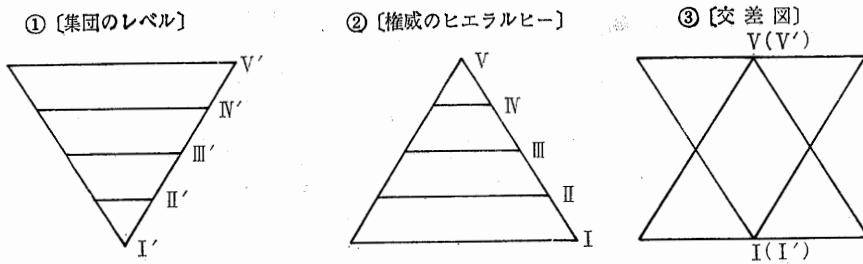
亀山：『明治の英雄像』の意味と構造

第1図 権威のヒエラルヒー



最下層の I に庶民像が位置している。彼らは、A～Dの窓口を通して、Iから上層に向けてⅡ～Ⅲへと昇段していくことができる。また、A～Dに所属する英雄たちも、価値の達成度に従ってⅡ～Ⅲの範囲に位置づけられている。しかし、Ⅳは皇室、Ⅴは天皇の位階を示し、いかなる英雄といえども、この領域に立ち入ることは不可能とされた。A～Dの各項は、庶民にとっては上昇のルートであり、天皇にとっては下方から民衆のエネルギーを吸引するためのパイプとなった。

第2図 権威—集団の交差図



ところで、権威のヒエラルヒーは、集団の次元と交差させて理解されなくてはならない。第2図の①は集団の水準を図示したものである。I' が個人、II' が家族、III'～IV' が地域集団をはじめとする中間集団、V' が国家を意味する。この集団の水準①と権威のヒエラルヒー②とを交差させたのが、第2図の③である。①のI'～V'が②のI～Vと対応する。

日本の集団構成においては、集団水準の、より内側に位置する集団が〈私〉として、より外側に位置する集団が〈公〉として意識され、〈公〉は常に〈私〉に対して優位性を維持していた¹⁹⁾。したがって、内部から外部へ向うにつれて集団の圧力が高くなり、内側に位置する成員は、常に外部集団に向けて奉仕、貢献を要求された。

こうした事情は、修身書中の「よい日本人」という項目に集約して表現されている。「よい日

本人となるには、忠義の心を持ち、父母にかうかうをつくし、兄弟仲よくし、先生をうやまひ、友だちにはしんせつにし、近所の人にはよくつきあはなければなりません。正直でけんそんで、心はくわんだいに、じぜんの心もふかく、人から受けた恩を忘れず、人ときようどうしてたすけ合ひ、……又、せけんのためにこうえきをはからなければなりません。……かようにじぶんのおこなひをつつしんで、よく人にまじはり、よのため、人のためにつくすように心がけると、よい日本人になれます²⁰⁾。」(傍点筆者)

以上のことを交差図③で示すならば、次のように理解されるであろう。最下層Ⅰに所属する庶民は、頂点に向けて上昇してゆくためには、私を捨てて、個人を越えた外部集団(Ⅱ'~Ⅴ')のために奉仕、貢献しなくてはならない。しかも、集団水準のより上位に位置する集団(Ⅳ'~Ⅴ')に貢献することが、より高く評価されるのであるから、個人は貢献の対象を拡大してゆかざるを得ない。そして、国家(Ⅴ')への貢献度の大きい人物が、最高の英雄像とされる。たとえば、一兵士としてではあれ、国家への忠義のために勇敢に戦い、「ラッパヲクチニツケタママ」死んだ木口小兵は、「軍神」にまでされたのであった²¹⁾。

ところで、「権威のヒエラルヒー」および「交差図」を成立させる根本原理は何か。権威のヒエラルヒーにおいて、諸英雄は天皇に対する「臣民」と規定されているが、〔君子/臣民〕を接合する中心軸が「忠孝」の道徳である。「子の父母を敬愛するは人情の自然にして、忠孝の大義は此の至上より発するものなり。……我が国は家族制度を基礎とし、国を挙げて一大家族をなすものにして、皇室は我等の宗家なり。我等国民は子の父母に対する敬愛の情を以て万世一系の皇位を崇敬す。是を以て忠孝は一にして相分れず。……忠孝の一致は実に我が国体の特色なり²²⁾。」このような忠と孝との結合は、孝の連続的な拡大としての忠と、孝に対する忠の優位性の名のもとに「家族国家観」のイデオロギーを構成する²³⁾。

また、交差図に示される天皇(Ⅴ)と国家(Ⅴ')の同一視は、忠君と愛国の両徳目を結合させ、「忠君愛国」の道徳原理を導く。天皇=国家の図式は、封建的な多元的支配の形態を国家のもとに一元化するためのイデオロギーとなる。封建的支配の地方主義や家と村の繁栄という「凡人の夢」を表現した「桃太郎主義」から²⁴⁾、人々の注意を引き離し、国家次元に国民として統合する必要があったのである。石田雄のいうように、家族国家観と忠君愛国の道徳原理は、支配の頂点への一元化とヒエラルヒーの下部への拡大という意図をもっており、のちに国家主義イデオロギーの基盤となったのである²⁵⁾。

3. 意味と構造(≡)

2. では構造を支配-被支配の側面から述べたが、次には被支配者(臣民)相互の関係に注意する必要がある。

唐沢富太郎によると、君子と臣民の関係は〔明治天皇/二宮金次郎〕の対比項によって典型的に代表されていた。金次郎像は臣民の典型を意味しており、彼のヴァリエーションが各領域に配置されていた²⁶⁾。したがって、この金次郎像を基点にし、彼との相互関係から、臣民としての英雄像の構造が構成される。

英雄像は、各自に割り当てられた徳目のみを意味するのではない。英雄像相互間の関係構造が、社会集団の役割モデルを意味するのである。そこで、構造を構成する代表的なモデル群を対比項で示してみよう。

(1)「立身出世」のモデル

さきに示した権威のヒエラルヒーでは、階梯の相違が重要な意味をもっていた。どの階梯に位置づけられるかによって、その英雄像の「偉さ」が決定されるのである。「偉さの尺度」は英雄像を測定する尺度である。修身書中に登場する刻苦勉勵する人物像たちは、みな印で押したように、「後には偉い(りっぱな)人になりました」という文句で締めくくられている²⁷⁾。このことは、彼らがヒエラルヒーの階梯を上昇していったことを意味している。

ところで、このような上昇志向のモデルは、二宮金次郎と豊臣秀吉(木下藤吉郎)の対比によって示されている。前者の金次郎は、明治の体制からの要請にしたがって急速にクローズ・アップされた人物像であり、後者の秀吉は長い間人々に慕われてきた人物像である。しかし、両者ともに最下層(I)から階梯を上昇していった人物たちにはかわりはない。

両者の共通点はこれにとどまらない。「骨身を惜しまず仕事にはげみ/夜なべ済して手習読書、せはしい中にも撓まず学ぶ/手本は二宮金次郎²⁸⁾。」こうした絶え間ない刻苦勉勵の努力が、彼らの立身出世を可能にしたという指摘である。一方を「金次郎主義」、他方を「藤吉郎主義」と命名されたが²⁹⁾、注意すべき点は、一方が出世の階梯を登りつめ、天皇以上の権勢をふるいえたのに対して、他方はヒエラルヒー内の底辺を形成したことである。すなわち、両者においては立身出世の意味が相違している。この相違を図示したのが、第1図の②において示された二本の矢印である。藤吉郎は①の方向へ上昇したが、金次郎は報徳の四大主義の一つ、「分度を立つるを以て体とし」に表現されるように、②の方向へ接近する。藤吉郎主義から金次郎主義への力点の移行は、この時代の「立身出世」の意味変化と対応していたと思われる³⁰⁾。

(2)「孝行」のモデル

これは、[金次郎/おふさ/上杉鷹山]という対比から意味される。「柴刈り、縄なひ、草鞋をつくり/親の手を助け、弟を世話し/兄弟仲よく孝行つくす/手本は二宮金次郎」と唄われたように³¹⁾、金次郎像のもう一面は「孝行」の典型である。

「昔播磨におふさといふ孝行な女がありました。家が貧しいため八歳の時から子もりなどにやとはれて、暮しをたすけました。又、父がぞうりやわらじをつくるそばで、わらを打って手伝ひました。十一歳の時からほうこうに出ましたが、主人からいただいたものは父母に送りました。又ひまがあれば主人のゆるしをうけてかへり、ねんごろに両親をなぐさめていたはりました³²⁾」ここに示された「おふさ」という女性は、「孝女」のモデルである。[金次郎/おふさ]の対比は庶民の男女像であると同時に、両親に対する子のあり方を示す役割モデルを意味する³³⁾。

いま一人これに米沢藩主の上杉鷹山が付加されると、[庶民/領主]の対比が示され、各身分における「孝行」のあり方が意味されることとなる。

(3)「忠勇の士」のモデル

これは、[木口小兵/広瀬中佐/楠木正成]の対比によって示される。木口小兵と広瀬中佐は、それぞれ日清・日露の両戦役で戦死した兵士である。彼らは、その特異な死のあり方によって「忠勇なる士」として喧伝され、国定教科書にも採録されたのである。この系列には、他にも橋中佐、佐久間艇長、乃木将軍があげられる。

「明治三十七八年ノ戦役ニ、君ノタメ国ノタメ、名誉ノ戦死ヲトゲタ軍人ハ大ゼイアツタガ、ソノ中デモ海軍ノ広瀬中佐、陸軍ノ橋中佐ノ二人ハ軍神トマデイハレタ³⁴⁾。」

このような軍人像は、明治の両戦役が生み出した共時的英雄である。これらに楠木正成が加わることによって、〔共時/通時〕の対比が示され、歴史を通して、皇室への忠義のあり方が意味される。周知のように、楠木正成・正行父子は、不利な戦局において最期まで皇室への忠誠を守り、皇室のために戦ったのであった。「我が死ニタル後モ、一門ノ者一人ニテモ生き残りテアル者ハ、忠義ノ兵ヲ起シテ、天皇ノ御タメニツクスベシ³⁵⁾。」

(4)「女子の務」のモデル

これは、〔水兵の母/山内一豊の妻/楠木正行の母〕の対比によって示される。修身書巻六において、「男子は成長の後家の主人となりて職業に務め、女子は妻となりて一家の世話をなすもの」として、「男子の務、女子の務」が規定される。女子の務には二つの側面がある。「内に居て一家の世話をなし、家庭の和楽を図る」主婦の側面と、「女子の母として子供を育つことの良否は、やがて其の子の人となりに影響を及ぼす」母の側面である³⁶⁾。前者が山内一豊の妻に、後者が水兵の母、正行の母に代表される。

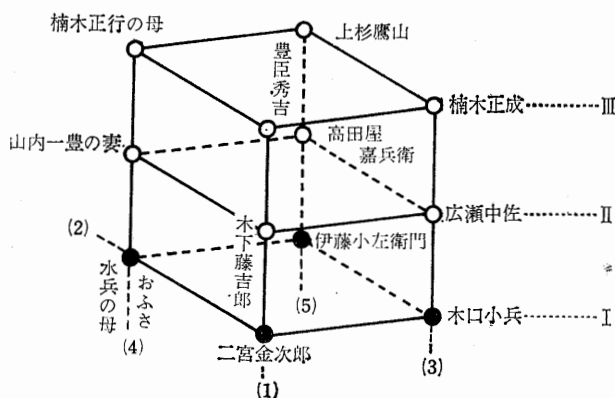
一豊の妻は、夫の大事な務をかげで支える「気丈の妻」の像を、また、水兵の母は、出征した息子にあてて、「何の為にいくさには御出でなされ候ぞ。一命をすてて君に報ゆる為には候はずや」と書き送る「軍国の母」の像を意味していた³⁷⁾。この妻と母の像は統合されて、次のように規定される。「凡そ婦人の道は夫を助けて家政を治め、子に教えて家名をあげしむるにあり。外温順、愛敬の徳を守りて、内確固たる志操を持し、如何なる事変に際しても、自若として其の常を失はざるは日本の女子の美德なり³⁸⁾。」

(5)「殖産・公益」のモデル

これは、〔伊藤小左衛門/高田屋嘉兵衛/上杉鷹山〕の対比によって示される。彼らはともに「進取の気象」に富み、産業を興して家門や地域社会の繁栄をはかった「富国」の模範像である。「鷹山は産業を興して領内を富ましめんとはかり、新に荒地を開いて農業をいとなまんとする者には農具料・種籾等をあたへ、三年の間租税を免じたり³⁹⁾。」

以上において、代表的なモデルを対比項として示した。これらの構造を図示したのが第3図である。図中I～IIIは身分の上下を示す。Iの次元が庶民像の次元であり、第3図はこの次元を基

第3図 臣民像の構図



盤として構成されている。なお、この図から判断できるように、上記の五例以外に様々な対比項が考えられるであろう。

4. 意味と構造(四)

修身書に顕著のように、国定教科書に登場する諸人物像は何らかの徳目と結合されている。収録された徳目は決して恣意的に選択されたものではない。それらは全て、天皇制支配の中心原理（忠孝、忠君愛国）の周辺に位置づけられている。人物像と徳目との結合は、徳目という足枷によって、人物像をこの中心原理へ結びつける結果となる。そして、徳目が強調されればされるほど、人物像は徳目の方向へ断片化され、活力を喪失して貧血症状を呈することになる。たとえば、あの大閥ですら、「秀吉は力をつくして皇室の御ためをはかりました」と⁴⁰⁾、彼の英雄としての帯電力を低減され、ただの忠義の人に矮小化されてしまう。

権威のヒエラルヒー内に吸収された英雄たちのそれぞれが、硬化現象を起こすのは、彼ら全体を包摂する容器との関係に帰因する。一元的に構成されたヒエラルヒーは、中心原理と抵触する全ての価値を、その内部からはじき出し、しかも内部に吸収された諸価値（徳目）は中心原理と照応するように、ますます純化される。

したがって、様々な価値を体現する多様な人物像が否定されると同時に、反英雄像そのものも非教科書の世界へ追放される。しかも、各英雄像が本来持っていた反英雄性も純化作用によって当人から除外され、彼は一面的な模範像と化してしまう。

このような経過は、教科書全体の硬化を生み出し、受け手の子どもたちにとって、魅力の少ないものとしたであろう。Iで述べたように、子どもたちにとって魅力ある人物像（理想像）は、常に悪の要素をも含み込んだ人物であるからである⁴¹⁾。

ところで、伝統的に世俗価値を国王が、道徳的価値を教会が、それぞれ分割統治していた西欧社会は、本来多元的価値の基盤を有し、多様な英雄像をもちえた。以上の分析からこの対極に明治の天皇制社会を位置づけることができる。メリアムの言うように、「権力の常套手段は、信仰せらるべきさまざまなもの、すなわちクレデンダと讃嘆されるべきさまざまなもの、すなわちミランダで自分を飾りたてる」のであり⁴²⁾、権力の組織化と象徴の構成の仕方には、何らかの相関関係が存在している。明治期の国定教科書の分析は、その間の事情を示す1つの特殊な事例といっただろう。

注

- 1) 模範像—理想像の区別は、価値客体—価値意識の区別に対応する。作田啓一は、この両者を「価値」という言葉でくくるが、ここで使用する「英雄像」をこの価値に対応させたい。（作田啓一、『価値の社会学』、岩波、昭和47年、p.10）
- 2) E・デュルケム、『宗教生活の原初形態』（古野清人訳）、岩波文庫、（下）、p.334。なお、デュルケムの要訳は、訳書（下）、pp.71~115、pp.321~376による。
- 3) M・シェーラー、『典型と指導者』（水野清、田島孝訳）、『シェーラー著作集15』白水社、1978、pp.150~158。
- 4) 以下の要訳は、前掲書 pp.176~288に従っている。
- 5) 享受の芸術家に相当する人物像として、性的快楽の追求者であったカザノーヴァやドン・ファンのタイプと、おしゃれを精神化するダンディーのタイプがあげられる。たとえば、伊達者・ブランメルは服装や物腰や言葉使いによって、並みいる天才や王侯を魅了してしまう。彼は《風采によって君臨する》

のである。ドン・ファンもダンディーもともに生き方において徹底性と一貫性をもち、彼らは生き方の芸術家と言える。

- 6) O・E・クラブによれば、多元的社会的モデルはアメリカである。アメリカの英雄たちは相互に相殺作用を及ぼし、あるものが絶対化されることはないという。(O・E・クラブ、『英雄、悪漢、馬鹿』(仲村祥一、飯田義清訳)、新泉社、1977、p.32。
- 7) 柳田国男、「口承文芸史考」、『定本柳田国男』第6巻、筑摩、昭和43年。
- 8) O・E・クラブ、前掲書、p.22~27。
- 9) 後に、クラブは有名化の過程を7段階に分けて詳しく考察している。Orrin. E. Klapp, *Symbolic Leaders*, Minerva Press, 1964, p. 34~35.
- 10) 松田修、「太閤伝説の形成」、『日本近世文学の成立』、法政大学出版、1972。こうした伝説化の現代版を、若くして亡くなった映画俳優ジェームス・ディーンにみることができる。(エドガール・モラン、『スター』、渡辺淳、山崎正己訳、法政大学出版、1976)
- 11) 記号は、認知的、表現的、評価的の三次元が区別されるが、英雄像=記号は主として評価的記号に該当する。(T・パーソンズ、E・A・シルス、『行為の総合理論をめざして』、永井、作田、橋本訳、日本評論社、1960、pp.264~273)
- 12) シェーラーも次のように述べている。「典型を持っている人は自分のはっきりと記述しうる明確な理念として典型を知っていることは稀でしかない」のであり、それゆえ「典型の有効性が強ければ強いほど典型を知ることが少ない。」前掲書、p.164。
- 13) 理念的文化と制度的文化とは、前者がいまだ社会体系の外側にある理念としての文化で、モラルにあたり、後者は、状況の要請という濾過器をくぐって制度化された文化で、モラルiteにあたる。作田啓一、前掲書 pp.74~76。
- 14) 修身書について。「修身ハ教育ニ関スル勅語ノ旨趣ニ基キテ児童ノ徳性ヲ涵養シ道徳ノ実践ヲ指導スルコトヲ以テ要旨トス」。(小学校令施行規則第2条、1900年)、山往正己、『教科書』、岩波新書、p.53。
- 15) 使用する教科書は、第2期国定教科書のうち、修身、国語読本、唱歌に限定される。尋常小学修身書巻1~6(以下、修身書と略す)、海後宗臣、仲新編、『日本教科書大系』近代編、第3巻講談社。尋常小学読本巻1~12、(以下、読本と略す)、『大系』近代編第7巻。尋常小学唱歌(以下、唱歌)、『大系』近代編、第25巻。
- 16) 修身書、巻5、第1課「大日本帝国」『体系』3、p.96。
- 17) 修身書、巻6、第26課「教育に関する勅語」、『大系』3、p.121。
- 18) 権力と倫理の両領域の支配者として、天皇は位置づけられたため、両領域の相互浸透が生じ、特殊な支配形態が形成される。丸山真男、「超国家主義の論理と心理」、『現代政治の思想と行動』、未来社、1964、pp.13~21。
- 19) 有賀喜左衛門、「公私の観念と日本社会の構造」、『有賀喜左衛門著作集』、第4巻、未来社、1963、pp.231~233。
- 20) 修身書、巻3、第27課「よい日本人」、『大系』3、p.83。
- 21) 修身書、巻1、第17課、『体系』3、p.65。
- 22) 高等小学修身書、石田雄、『近代日本政治構造の研究』、未来社、1956、p.23より重引した。
- 23) 第2期国定教科書において、はじめて家族国家観が明確にうち出された。このため唐沢富太郎は第2期の教科書を「帝国主義段階の教科書」と命名している。唐沢富太郎、『教科書の歴史』、創文社、昭和31年、p.8~10。
- 24) 柳田国男は、昔話がメデタン、メデタンと終るのは、一族、一村の繁栄を願う「凡人の夢」を表現しているためであるという。柳田国男、前掲書。
- 25) 石田雄、『明治思想史研究』、未来社、1954、p.14。
- 26) 唐沢富太郎、前掲書、pp.730~732。
- 27) たとえば、渡辺登(華山)。「……このようにきりつただしくしましたのでゑも大そう上手になり、かくもすすんで、のちにはえらい人になりました。」(傍点筆者)、修身書、巻3、第6「きりつ」、『体系』3、p.76。

亀山：『明治の英雄像』の意味と構造

- 28) 唱歌，第2学年用，「二宮金次郎」、『大系』25，p. 355。
- 29) 太閤主義は藤吉郎主義に還元されて解釈されるという神島二郎の指摘をふまえて，見田宗介は金次郎主義がエリート選抜体制から疎外された民衆の「立身出世」モデルとなり，両者はパラレルな関係にあったと指摘している。見田宗介，『立身出世主義』の構造』、『現代日本の心情と論理』，筑摩，1971，pp. 189～190。
- 30) 明治後期には，学制の整備によりエリート選抜のルートが完成される。それに伴って，立身出世の意味も維新期の「英雄的成功主義」とは相違したものとなる。門脇厚司，「日本の『立身・出世』の意味変遷」、『教育社会学研究』，東洋館，第24集，昭和44年。
- 31) 唱歌，前掲書。
- 32) 修身書，巻4，第8「孝行」，前掲書，p. 87。
- 33) 「実際また15歳に足らぬわたしは尊徳の意気に感激すると同時に，尊徳ほど貧家に生まれなかったことを不仕合せの1つにさえ考えていた。」という芥川龍之介のアイロニカルな表現が，リアリティーを持って受けとられたゆえんである。芥川龍之介，『侏儒の言葉』，角川文庫，pp. 216～217。
- 34) 読本，第24「橋中佐」、『体系』7，p. 142。
- 35) 読本，第1「楠木正成」，前掲書，p. 106。
- 36) 修身書，巻6，第24課「男子の務と女子の務」，前掲書，p. 121。国定教科書を通じて，父親の像より母親の像のほうがはるかに数が多い。しかも，水兵の母にしても，武士の母のイメージであり，純粋に庶民の母のイメージではないことに注意を要する。
- 37) 読本，巻9，第7課，前掲書，p. 150。
- 38) 読本，巻12，第8課「日本の女子」，前掲書，p. 236。
- 39) 修身書，巻5，第11課「産業を興せ」，前掲書，p. 100。
- 40) 修身書，巻4，第7課「皇室を尊べ」，前掲書，p. 87。
- 41) 魅力に欠けていたにもかかわらず，戦前の教育が「国民教育史上で，世界でも驚異的な教育効果を挙げ」えた事実を忘れてはならないだろう。唐沢富太郎，『世界の理想的人間像』，中央公論社，1963，p. 1209。
- 42) C・E・メリアム，『政治権力』，(齊藤真，有賀弘訳)，東大出版会，1973，p. 147。